08年エビ類

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

年	数量 輸入 活	輸入 ｲｾｴﾋﾞ	輸入 冷ｴﾋﾞ	東京 生車	東京 冷輸入	家計消費 生（ｸﾞﾗﾑ）	在庫	価格 輸入 活	輸入 ｲｾｴﾋﾞ	輸入 冷ｴﾋﾞ	東京 生車	東京 冷輸入	消費支出 生（円）
19	1.1	5.6	207.9	0.5	15.0	1,902	80.8	4,256	2,711	991	5,550	1,357	3,632
20	0.9	4.2	197.2	0.5	13.1	2,005	73.5	3,944	2,589	928	5,204	1,347	3,628
%	82	75	95	93	87	105	91	93	95	94	94	99	100

輸入国（冷エビ類）　　単位:千トン

年	中国	ﾐｬﾝﾏｰ	ﾍﾞﾄﾅﾑ	ﾀｲ	ﾌｨﾘﾋﾟﾝ	ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ	ｲﾝﾄﾞ	Gﾗﾝﾄﾞ	ｵｰｽﾄﾗﾘｱ	ｶﾅﾀﾞ	ｴｸｱﾄﾞﾙ	ﾛｼｱ	ｱﾙｾﾞﾝﾁﾝ	調整品
19	24.0	8.0	40.0	26.4	4.3	37.1	27.0	5.4	1.9	7.6	0.7	8.9	1.9	66.5
20	16.8	6.8	42.2	25.0	3.5	37.4	24.0	5.6	2.3	7.7	0.8	7.8	2.6	64.1
%	70	85	105	95	83	101	89	102	119	101	107	87	137	96

輸　入　の　動　向

20年の冷凍エビので、19.7万トンで前年（20.8万トン）を引き続き下回った。

昨年ＢＴ、天然ホワイトを抜いて種としてトップにたったバナメイは生産が依然増大しており、アジアではｋベトナムとう世界的にはエビ生産の６０％を占めるようになり、ついにた画期的な年になった。

エビだけではなく、他魚種も含めて買負け現象が上半期も続いたが、ただ米国も前年の後半からサブプライムローン問題もあって、２００６年をピークにエビ類は需要後退の局面もみられ、引き続き輸入は若干減少している。

冷凍エビ輸入価格は、928円でバナメイの増加もあって前年（991円）を下回って推移し、６年続きで三桁（９００円台）の価格となった。

本年は、１１０円台の為替ドル高円安スタートから始まり、その後円高で推移し４月に１００円を記録した。その後９月まで円安に変わったが、それ以降（リーマンブラザーズを契機に）は極端な円高（９０円を割る程）になり、燃油問題から世界的な金融危機の勃発で焦点が移り、来年以降のエビの輸入回復の話も出てきた。

主要輸入国は、引続きベトナムが4.2万トン(前年4万トン)でトップを維持し、次にインドネシア3.7万トン（前年3.7万トン）であったが両国少ないながらも増加している。続いてタイが2.5万トン（前年2.6万トン）、インドが2.4万トン（前年2.7万トン）で、また中国は1.7万トン(前年2.4万トン)と減らし、餃子問題に代表される中国製品問題の影響もあってか減少した。

また、赤エビは刺身需要も安定・定着しているが、本年は前年あったアルゼンチンエビの在庫過多問題は少なく、カナダとグリーンランドがそれぞれ7.7千トン（前年:7.6千トン)、5.6千トン（前年：5.4千トン)と前年をやや上回った。しかしロシアでもほぼ7.8千で前年（8.9千トン）をやや下回った。

また、近年製品需要も若干停滞気味になっている調整品の輸入量が6.4万トンで前年の6.7万トンをやや下回り、成熟化してきていることを裏付けている。スシエビや尾付きエビ、ボイル、フライ等のころも付き関係はタイ2.1万トン(前年:2.1万トン)や、ベトナム8.9千トン(前年:9.1千トン)、インドネシア5.7千トン(前年：6.8千トン)、中国0.8万トン(1.1万トン)で各国とも頭打ち若しくは

減少傾向が顕著になってきている。

在　庫　量

本年の在庫量は、7.4万トンと前年(8.1万トン)を下回った。

本年は輸入量の減少があったものの、末端消費は価格帯の低いバナメイの消費が好調だったことを反映したものである。

本年も例年在庫が増加する8月以降、一時的に在庫は多くなったが、年末を中心に特売等も多かったことで消化が進み越年在庫は、７万トン割れの低水準となった。

消費地入荷量と価格

20年の東京消費地における冷凍エビ類の入荷量は、1.3万トンで前年（1.5万トン）を下回り、漸減傾向が続いた。

本年の東京消費地価格は、1,347円で前年（1,357円）を僅かながら下回ったが、輸入価格を反映した格好となった。

本年のエビを巡る特徴は、①前年に比べると当初の為替円安から急激な円高、そして円安、１０月以降は極端な円高基調となったが為替変動による為替リスクが極めて大きくなってきた、②原油の高値は上半期一杯続き、生産縮小の影響もでたが、下半期には米国の買いも弱く浜値（ＢＴ）も下げ基調が顕著になった、③国内的には業務筋での売れ口の悪さは相変わらずであったが、家計消費は単価の下げもあったりで、特売も多く久し振りに数量が前年を上回り、金額ベースでは前年並みであった、④様々な状況の中で久し振りに日本が注目される事態となり、来年に期待をもたせらてた、こと等である。